神奈川県立総合教育センター研究集録 29:11～16. 2010

言語活動の充実に関する研究

― 小学校における授業実践を通して ―

渡辺　良勝[1]　　山本　城[1]

新小学校学習指導要領では、言語活動の充実が大きな特色として示され、国語科以外の各教科等においても言語活動を扱うことが求められている。本研究では、小学校の国語科、社会科、算数科、理科の実践を通して、新小学校学習指導要領の考え方に沿った単元計画及び授業展開例についてまとめた。研究を通して、教師の適切な指導に基づいた言語活動が、思考力、判断力、表現力等の育成につながることが分かった。

はじめに

平成20年1月に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（以下、「中教審答申」という。）の教育内容に関する主な改善事項の第一に言語活動の充実が示された。これを受けて、平成20年3月には、新小学校学習指導要領（以下、「新指導要領」という。）が告示され、その特色の一つとして言語活動の充実が示された。

研究の目的

「中教審答申」では、国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であるといわれている。子どもたちに言語に関する能力を身に付けさせることは、思考力、判断力、表現力等やコミュニケーション能力を育成する点からも重要なことである。

本研究は、子どもたちにこれらの能力を身に付けさせるために、小学校の各教科等において、言語活動の充実を図るための単元計画及び授業展開例を示し、「新指導要領」の考え方に沿った授業の実現に資することを目指した。そして実践例を示す教科として、国語科、社会科、算数科、理科の４教科を取り上げた。

研究の内容

１　「新指導要領」で求められている言語活動

(1) 言語活動の充実とは

「新指導要領」の「第１章　総則　第１　教育課程編成の一般方針」の初めの部分に言語活動の充実が示されたということは、言語活動の充実が今回の改訂の大きな特色の一つということである。そこには、「児童に身に付けさせたい能力や態度」「教育活動を展開する上で重要なこと」「教師が配慮すべきこと」等が示されている。言語活動の充実は、これらのことに取り組むために必要な要素の一つであると考えることができる。

また、同じく総則の「第４　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の２の(1)には次のように示されている。

> 各教科等の指導に当たっては，児童の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，児童の言語活動を充実すること。

この文章からも、言語活動は、児童に必要な能力を身に付けさせるために必要な要素の一つであると考えることができる。

このように考えると、学習活動に言語活動を取り入れるだけでは、言語活動の充実が図られたことにはならないということである。大切なことは、言語活動を行うことで、例えば、児童の思考力、判断力、表現力等が育成されたかどうかということである。

また、今回の改訂において、前掲の「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の冒頭に、「各教科等の指導に当たっては」という言葉が示されたということは、言語活動の充実は、国語科に限らず他の教科等においても取り組むということである。つまり、国語科で身に付けた日常生活に必要な言語に関する能力を、他教科等においても積極的に活用し、言語に関する能力を高めていくことが求められているのである。そして、言語活動の充実を図ることで、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくみ、さらには各教科等の目標を達成することを目指しているのである。

(2) 言語活動の充実が求められるようになった背景

言語活動の充実が求められるようになった背景には、様々な理由が考えられるが、研究の目的で述べたように、これからの「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに求められている、思考力、判断力、表現力等やコミュニケーション能力に課題があることが理由の一つといえる。

1　カリキュラム支援課　指導主事

例えば、「中教審答申」の「３．子どもたちの現状と課題」から、現在の子どもたちには、次に示したような課題があると読み取ることができる（中央教育審議会　2008　pp12-13）。

・平成 15 年実施の教育課程実施状況調査の結果からは、国語の記述式の問題の正答率が低下していること。
・平成 15 年（2003 年）の国際的な学力調査（PISA 調査及び TIMSS 調査）の結果からは、読解力や記述式問題に課題があること。
・平成 19 年の全国学力・学習状況調査の結果からは、説明文で述べられている事柄を要約すること、資料から必要な事柄を取り出して与えられた条件に即して書き換えることについて課題がみられること。

また、平成 20 年６月の文部科学省「検証改善サイクル事業成果報告書　神奈川県検証改善委員会」の結果分析「『かながわの学びづくり』－学校・家庭・地域で育てよう子どもたちー」において、小学校・国語Ｂと小学校・算数Ｂに関して、次のような結果が示されている。

（小学校・国語Ｂ）
児童の平均正答率が 63.0 パーセントであり、知識や技能を活用する問題の正答率は知識に関する問題の正答率より低い。
（小学校・算数Ｂ）
児童の平均正答率が 63.6 パーセントであり、知識や技能を活用する問題の正答率は知識に関する問題の正答率より低い。
（文部科学省　2008）

この結果は、全国公立小学校の平均正答率と比べて、ほぼ同程度であり、神奈川県においても、記述式の問題等の正答率が低いことが分かる。

さらに、「中教審答申」の「５．学習指導要領改訂の基本的な考え方」の「（７）　豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」では、コミュニケーション能力の育成の必要性が、次のように述べられている。

特に、国語は、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。
（「中教審答申」p28）

こうした課題等を踏まえ、「中教審答申」の「７．教育内容に関する主な改善事項」の（１）には、「言語活動の充実」が挙げられ、言語活動の充実を通して身に付けさせたい能力や具体的な活動例が示された。

また、各教科等における言語活動を行うに当たっての留意点として、第１に「子どもたちが積極的に学習に取り組むための工夫」、第２に「読書活動の推進」、第３に「言語環境の整備」が挙げられ、言語活動の充実を図るためのポイントが明確に示された。

(3) 各教科の言語活動のポイント

本研究で取り上げた４教科における言語活動のポイントは、新小学校学習指導要領解説の各編を参考にすると、次のようにとらえることができる。

【国語科】

国語科は、言語活動の充実を図るための中心的な役割を果たす教科である。国語科では、日常生活に必要な基礎的な国語の能力を身に付けることが求められている。そのため、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の各領域において、日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動が示され、継続的に指導することが必要とされている。また、基礎的・基本的な知識・技能を活用して、相互に思考を深めたりまとめたりしながら学習課題を解決していく能力を育成することも重視されている。

【社会科】

社会科では、観察や調査・見学等の体験活動やそれに基づく表現活動の充実が求められている。体験活動においては、社会的事象を具体的に調べたり基礎的資料を効果的に活用したりする力を育てることが求められており、表現活動においては、体験活動を通して考えたことを表現する力を育てることが求められている。その際、４年間の社会科学習を見通した指導計画を作成することが大切である。

【算数科】

算数科では、算数的活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けたり、思考力、判断力、表現力等を高めたりすることが重視されている。児童の思考力、判断力、表現力育成のためには、日常の言語をはじめ、数、式、図、表、グラフなどの手段を用いて考えたり、自分の考えを説明したり表現したりする学習活動を充実させることが求められている。また、算数的用語を正しく用いることも必要とされている。

【理科】

理科では、児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように、観察・実験の結果を整理し、考察し表現する学習活動や、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの活動が重視されている。例えば、観察記録や実験データを表に整理したりグラフに処理したりすることにより考察を充実させたり、表やグラフなどを活用しつつ科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりすることにより考察を深めたりすることなどがある。

２　言語活動の充実を図る授業実践に向けて

(1) これまでの実践を振り返って

小学校では、これまでも現行学習指導要領の考え方に沿って、言語活動に取り組んできている。しかし、「中教審答申」の「４．課題の背景・原因」では、現行学習指導要領の理念を実現させる手立てが必ずしも十分ではなかったことが指摘されており、言語活動の充実を図るためには、次のことを把握する必要があるといえる（中央教育審議会　2008　pp17-19)。

- 基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等をいわば車の両輪として相互に関連させながら伸ばしていくことが現段階においても十分に共有されているとは言いがたいこと。
- 子どもの自主性を尊重する余り、教師が指導を躊躇する状況があったのではないかということ。
- 教えて考えさせる指導を徹底し、基礎的・基本的な知識･技能の習得を図ることが重要であること。
- 教科において、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、それらを活用する学習活動を充実させることにより思考力・判断力・表現力等をはぐくむ必要があること。

そこで、本研究を進めるにあたって、「中教審答申」の指摘を参考に、４名の調査研究協力員と共に、これまでの実践を振り返り、言語活動が充実してこなかった理由や、言語活動について見直しが必要な点について考えた。その結果、次のような課題が浮かび上がってきた。

【言語活動の取組みの様子と教師の指導の視点から】

- ペア学習や少人数グループ等の話合い活動を行ったり、学習カードを活用したりすることで、言語活動が達成できたととらえてしまい、教科目標や単元目標の達成という視点で、言語活動の成果をとらえていなかったのではないか。そのために、活動の改善が行われず、適切な指導につながらなかった。
- 子どもが話したり書いたりした内容について、既習の言葉や適切な言葉を使っていなくても、「その子なりの考えだから」とか「子どもが一生懸命考えて話した（書いた）ことだから」ということで、的確な指導が行われてこなかったのではないか。そのために、学習内容の理解があいまいになり、学習内容が確実に定着しなかった。
- 発表の仕方やノートの書き方等の基本的な型についての指導が不十分だったのではないか。また、言語活動は国語科で行えばよいという考えから、国語科以外の教科指導において、積極的に言語活動を取り入れることが少なかったのではないか。そのために、児童の表現意欲を十分いかしきれていなかった。

また、次に示すような児童への指導が、適切ではなかったという課題も挙げられた。

【言語活動に困難を感じている児童の姿の視点から】

- 自分の考えを持っていても、どのように話せばうまく伝えることができるのかが分からずに、困っている子
- 自分の考えを表現する適切な言葉（語彙）が不足していてどう表現したらよいのか困っている子
- まとめたり整理したりする能力が不十分なために、学習内容の記録がきちんとできない子
- 文章の読み取り方や資料の見方がわからないために、自分の考えを持てずに困っている子

これまでの言語活動においては、教科目標を意識せず、教師の指導性が発揮されていない言語活動が展開されていたり、児童が持っている言語活動に対する困り感を取り除く取組みがなされていなかったりしたために、現行学習指導要領の趣旨を十分にいかした言語活動が行われてこなかったのではないかと考えられる。

そこで、この二つに視点を当てて授業改善を行うことにより、「新指導要領」で求められている言語活動の充実に迫ることができると考えた。

(2) 言語活動の充実に向けて

「中教審答申」の「４．課題の背景・原因」で述べられている「教えて考えさせる指導を徹底し、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る」という点や、前述の言語活動の振り返りから考えると、言語活動の充実を図るために必要な要素の一つとして、教師の適切な指導が考えられる。

発表の仕方やノートの書き方を指導するというと、「一つの型にはめることになるのではないか」といった考え方をされがちだが、学び方を学ぶという視点でとらえれば、児童の学習意欲を高めることにつながるだろう。

例えば、図画工作科や家庭科での制作活動においては、制作で使う用具等の使い方を単元の導入で指導する。また、音楽科での楽器演奏や体育科での鉄棒の演技等においても、その具体的な演奏方法や演技の仕方等を適宜指導する。そうすることにより児童は、自分の思いや願いを作品に表現することができたり、自分のイメージ通りに演奏したり演技したりすることができるようになる。

同様に、発表の仕方やノートの書き方等を指導すれば、児童が持っている、表現することへの不安を軽減したり、困っていることを取り除いたりすることができるであろう。そうすることにより、児童の表現意欲が高まることが期待できる。そして児童が積極的に表現活動に取り組むことにより、児童の言語に関する能力がはぐくまれ、思考力、判断力、表現力やコミュニケーション能力等を育成することができると考える。

３　言語活動の充実を図る学習指導事例

本稿では、本研究での４教科の実践例の中から、国語科と算数科の実践例の一部を、以下に紹介する。

(1) 国語科の実践（第６学年）

【物語「やまなし」〈資料〉イーハトーヴの夢】

【単元目標】

○物語に描かれた情景と表現を手掛かりに作者の思いを想像し、作品の世界を味わう。

○「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の作品に流れている宮沢賢治の思いを読み取る。

【言語活動の充実について】

自分の考えを持ち、考えを伝え合う力を身に付けさせるために、具体的な手立てとして次の点を考え実践した。

ア　自分の考えを整理し、発表につなげるために

○整理したノートの書き方を工夫させる。

○学習の振り返りができるノートづくりを心掛けさせる。

・枠で囲む、赤字で書く等の工夫をする。
・箇条書きで書いた方がよい場合は箇条書きにする。
・意味調べや宮沢賢治の思いや考えをまとめる時には、表にまとめる。

○接続詞を効果的に使わせる。（理由を述べるとき：「なぜならば」「なぜかというと」等）

イ　お互いの考えを分かりやすく伝え合うために

○発表の仕方の例を提示する。

・○○さんと同じで、～です。
・○○さんに付け足しで、～です。
・○○さんと別の考えで、～です。
・○○さんと同じですが、理由が違います。
・○○さんと理由は同じですが、考えが違います。
・○○さんの考えを聞き、私は、～と考えを変えました。

○自分の考えを全体で述べる前に、ペア学習や少人数グループ等の学習形態を取り入れる。

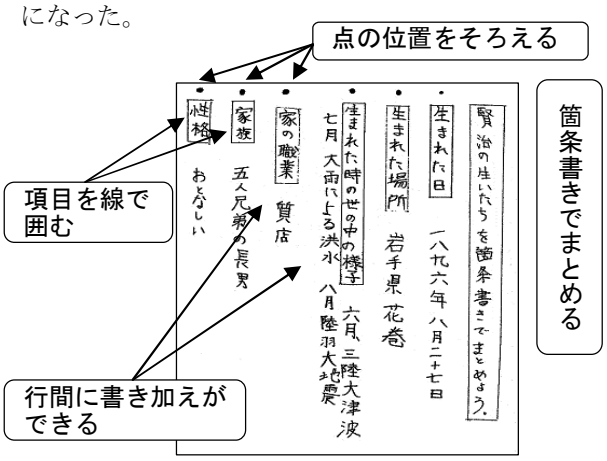
○全体での話合いのときには、机の配置を「コの字型」にする。

【実践後の考察】

ア　自分の考えを整理し、発表につなげるために

「ノートは財産である」ということを絶えず意識させ、学習の振り返りができるようなノートの取り方を工夫させてきた結果、児童に次のような変容が見られた。

・自分の考えを整理して書くことで、発表への自信が生まれ、発表もスムーズにできるようになってきた。また、自分の考えを基にしてそこから自分の考えを深めていくことができるようになってきた。
・自分のノートが学習の振り返りの資料となり、ノートをめくって見返す行動が多くみられた。
・箇条書きでまとめる際に記号や見出しを使用し、簡潔にまとめる工夫ができるようになった。（第１図）
・表を使うことにより、自分の考えを整理できるようになった。



第１図　ノートの工夫の例

イ　お互いの考えを分かりやすく伝え合うために

発表の仕方を提示したことにより、話し手の意図が聞き手に伝わりやすくなり、お互いの考えを理解しやすくなった。授業後の児童の感想から、友達の発言を聞いて自分の考えを深めている様子が分かる。

【授業後の児童の感想より】

・私はあんまり考えられなかったのですが、ほかの友達が本当に良い意見を出していたので、すごいと思いました。だから、その考えに対して「良い意見だと思います。」と言いました。そして、Ａさんの「自然を大切に」がとてもいいと思いました。これからは、ほかの友達を見習って良い意見を考えて出したいと思います。
・自分が思い付かなかったことをみんながいろいろ考えていたので、とても深まりました。特に、Ｅ君の意見が良かったです。もうちょっと発表したかったけれど、発表があんまりできなかったので、次こそは、人とかかわって深めていく授業をしたい。

ペア学習や「コの字型」の机の配置を取り入れたことにより、次のような成果があった。

・「全体で発表する前に二人で考えを発表し合うと、全体で手を挙げるときもどきどきしなくなる」という感想が多かった。
・二人だと短い時間で何回か意見交換ができるので、お互いの考えを聞き合いながら自分の考えを深めることができていた。
・お互いの顔が見えることで、「誰がどういう考えを持っているのか」ということをとらえやすくなった。そのため、お互いの意見の類似点や相違点を意識しながら考えを深められるようになった。

お互いの考えを伝え合う活動の充実により、学習内容の理解を深めることにつながった。

(2) 算数科の実践（第５学年）

【小数のかけ算】

【単元目標】

○乗数が整数である場合の計算の仕方を基にして、乗数が小数である場合の乗法の意味について理解する。

○小数の乗法の計算の仕方を考え、それらの計算ができるようになる。

○小数の乗法についても、整数の場合と同じ関係や法則が成り立つことを理解する。

【言語活動の充実について】

既習の乗法計算に関連付けて計算の仕方やその意味を考えることができるようにしたり、個の考えを全体のものにしたりするために、具体的な手立てとして次の点を考え実践した。

ア　考えを文章化し、説明につなげるために

左半分に自分の考え方の式や図を表現させ、右半分にそれを説明する文章を書かせるワークシート（第２図）を活用した。そのことにより、自分の考えを整理して文章化させ、筋道を立てて説明する力を身に付けさせ、学び合いにつなげた。

第２図　ワークシート

イ　友達の考えを確実に自分のものにするために

一つの考え方について複数の児童で説明をつなぐ「説明リレー」を取り入れた。説明の途中で教師が区切り、次の児童へ続きを説明させた。自分の考えのみに固執するのではなく、友達の考えを理解し、自分のものとすることで考えを広げ､深めることにつなげた。

【実践後の考察】

ア　考えを文章化し、説明につなげるために

式や図で表現した考えを文章化し、説明につなげることをねらいとしたワークシートには、大きく二つの成果があった。一つは、相手意識をもって説明する力の向上である。自分の考えを「まず～」「つぎに～」と接続詞を意識して３段階に分けてワークシートに書き込むことにより、一文を短く簡潔にまとめ、筋道を立てて説明することができるようになった。また児童は、説明の途中で「ここまでは分かりますか」（授業記録Ｃ１）と聞き手に確認しながら説明を続けていた。このことから、説明する先には相手がいることを意識していると考えられる。

もう一つは､算数的用語の活用に向けた成果である。子どもたちは「“かけられる数”と“かける数”を入れ換えて～」「さっき10倍したので10分の１に戻します」などと説明を書いていた。このことは、授業記録Ｃ１「かけられる数とかける数をひっくり返します」の発言内容でも確認できる。もしワークシートに文章化せずに、その場の思い付きで話してしまっていれば､「これ」「あっち」「元どおりにする」などと自分の感覚で説明してしまったと考えられる。また、「90×2.6 は、まだ習っていないので～」「小数×整数はもう習ったので計算できます」等、既習事項を活用することを自分自身で意識しながら説明できたことも文章化したことによる成果だと分析できる。

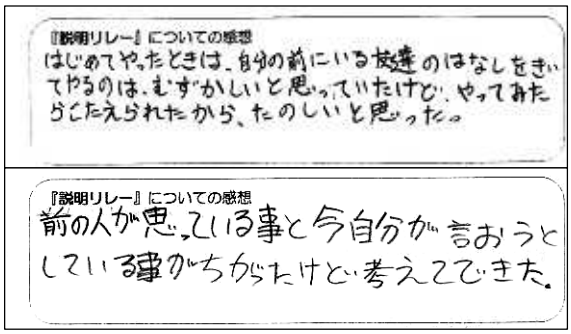
《授業記録（抜粋）》（Ｔ：学級担任　Ｃ：児童）

Ｔ　：	では、Ａさんの作戦について友達説明できる人はいますか？　（Ｃ：はい）では○○さん。
Ｃ１：	はい。まず、90×2.6 は、まだ習っていないのでできません。なので、かけられる数とかける数をひっくり返します。ここまでは分かりますか？
Ｃ全：	はい。
Ｃ１：	小数×整数は習ったので計算できます。すると答えは 234 になります。分かりましたか？

イ　友達の考えを確実に自分のものにするために

「説明リレー」は、説明のポイントを一つずつ区切って話さなければ､次の人につなげることができない。そこで、児童は必然的に伝えたいことを一つだけにして説明をするようになっていった。「説明リレー」は、１時間の授業の最後に友達の考えが自分のものになったのかを確かめる活動として行うため、ワークシート等に文章化することはない。しかし、児童はこの活動を通して、書かれたものがなくても頭の中で順序立てて考え、簡潔に説明する力を身に付けたといえる。

単元後のアンケート（第３図）からも、前の人の説明をよく聞いてその意図を理解したことや、説明をつなげること自体の面白さを感じていることを確認することができた。



第３図　単元後の児童アンケート

研究のまとめ

１　研究の成果

４教科の実践と日常的な取組みから、言語活動の充実を図ることは、児童の思考力、判断力、表現力、コミュニケーション能力等の育成や、さらには各教科の学習内容の理解につながることが分かった。

言語活動は、学習内容を理解させるための道具であると考えることができる。言語活動を道具と考えると、教師の適切な指導の必要性や児童の実態を考慮することの重要性がよく分かる。道具とは、場面や状況に応じて使い分けるものである。そうしなければ、より良い活動はできない。また、児童に道具を使わせるときには、使う前にその使い方を指導する。児童がその道具を使う力が不十分であるならば、より丁寧な指導が必要となる。つまり、児童の実態、教科、単元、学習する場所等、様々な要素を十分考慮し、適切な言語活動を選択することが重要である。そしてそのときに、児童の発達の段階に合わせて適切な指導を行うことも必要である。教師が、児童に話し方や書き方などの言語活動を理解させ、それらを適切に使う能力を身に付けさせることが、言語活動の充実を図るための教師の役割といえる。そして児童は、身に付けた力を活用して学習活動に取り組み、学習内容を理解するのである。

もう一つ教師の役割として大事なことは、各教科等の関連を図ることである。どの教科でどのような言語活動が有効であるのかということを考慮し、教科目標を意識した言語活動を実践していかなければならない。児童が身に付けた言語に関する能力を、各教科等において発揮させ、繰り返し活動させることにより、思考力、判断力、表現力等がはぐくまれていく。

研究を通して、「言語活動を行うことや言語活動を充実させること自体が目的ではない」という意味がより明らかになった。言語活動は、教科目標を達成するための一つの手立てである。その手立てを効果的に活用し、児童の思考力、判断力、表現力等やコミュニケーション能力が高まったとき、言語活動の充実が図られたといえる。

２　今後の課題

本研究では、小学校の国語科、社会科、算数科、理科の４教科の実践を通して言語活動の充実を図ることについて研究してきた。今後は、本研究で取り組んだ教科以外での取組みについても研究を進めていくことが必要であろう。また、小・中の接続を考えると、小学校での学習を受けて、中学校においてどのように言語活動の充実を図っていけばよいのかを考えることや、中学校での学習を見通して、小学校においてどのように言語活動の充実を図っていくことが望ましいのかを考えることも必要である。

おわりに

本研究を踏まえて当センターでは、「言語活動の充実を図る学習指導事例集」を作成した。本稿で紹介できなかった社会科・理科の実践例等を紹介してあるので、参照していただきたい。

なお、今年度研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言をいただいた横浜国立大学准教授青山浩之先生、ご協力いただいた４名の調査研究協力員の方々に、感謝の言葉を申し添えたい。

［調査研究協力員］

海老名市立杉本小学校	宮原　秀子
平塚市立山下小学校	山田　　誠
南足柄市立南足柄小学校	志澤　一彦
小田原市立酒匂小学校	松室　　裕

［助言者］

横浜国立大学	青山　浩之

引用文献

中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」p.28

文部科学省 2008 「『かながわの学びづくり』－学校・家庭・地域で育てよう子どもたちー」（『検証改善サイクル事業成果報告書』）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/08013006/003/016.htm（URL は 2010 年１月取得）

参考文献

時事通信出版局編 2008 『これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック　小学校』時事通信社

中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」pp.12-13、pp.17-19

文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説　国語編』東洋館出版社

文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説　社会編』東洋館出版社

文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説　算数編』東洋館出版社

文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説　理科編』大日本図書

山口大学教育学部附属光小学校 2008 『言語活動の充実を図る「視点と方法」のある授業～「とらえかたツール」で授業を変える～』明治図書出版

髙木展郎 2008 『「新学習指導要領」実践の手引き６　各教科等における言語活動の充実　その方策と実践事例』教育開発研究所